

社会起業家

Social Entrepreneurship: The Power to Transform

■分科会メンバー

高田修太*

尾崎裕哉

郭ヒギョン

木本篤茂

高橋亜矢

Mariama Holman*

Bryan Burns

Kunihiro Shimoji

Patrick McCurdy

Yuri Hongo

(*は分科会コーディネーター)



■分科会概要

貧困撲滅、子育て・高齢者支援、途上国支援などの役割は、これまで主に国や政府といった「官」の立場から担ってきた。社会起業家とは、その役割をビジネスの手法を用いて自ら担い、社会システム自体を変え、「民」の立場から解決策を世に広めていく者たちである。貧困層に無担保融資をする「グラミン銀行」から、病児保育を扱うNPO「フローレンス」まで、社会起業の種類は多岐に渡り、事業主体は営利団体から非営利団体、非政府組織、市民団体など様々である。それらが既存の枠組みを超えて、公の問題を民の力で解決しようとしている。

当分科会では、社会起業家への注目が高まるなか、日米における社会起業家のケーススタディを通して現状を探り、果たして利益の追求と事業の推進は両立可能なのか、なぜ社会起業家として問題に取り組むのかを議論し、その魅力を発信していく。日米から世界へ目を向けつつ、様々な観点から議論していきたい。

■事前活動

春合宿では、どういった分科会にしたいか、社会起業家とは何か、といったことを日本側参加者のみで話し合った。また、沖縄研修では Kunihiro Shimoji が同行したため、初のアメ리카側参加者を交えてのミーティングも事前に行うことができた。アメ리카側への知識の共有と共に、日本側が何をしてきたかということ伝える良い機会となった。



写真：春合宿でのワークショップ

本分科会では、フィールドトリップを重視し、それぞれを Social Entrepreneur のケースとして扱った。その事前活動として、日本国内の関連企業や講演会に訪れ、本会議でアメ리카側と共有し

た。以下、その説明である。

1. 土井香苗様：ヒューマン・ライツ・ウォッチ
東京オフィスディレクター

日時：6月21日（月）

場所：御茶ノ水 ヒューマン・ライツ・ウォッチ
東京オフィス

参加者：高田 修太

国際人権保護 NGO のヒューマン・ライツ・ウォッチの東京オフィスを訪問し、活動内容や NGO についてお話を伺った。活動の性質上、事業によって収入を得るわけではなく、寄付ベースになってしまう資金源についてのお話や、人権保護と文化の衝突に関する話をお聞かせいただき、社会的事業を行う上での資金調達の難しさについて学ぶことができた。

2. 電通

伊東美穂様 谷口隆太様 渡邊磨由子様

日時：6月16日（水）

場所：汐留 電通本社

参加者：高田 修太、尾崎 裕哉

日本最大手の広告代理店である電通がどのような CSR を行っているのか、どのようにして社会的企業を支援しているのかを学ぶためにお話を伺った。電通としての関わり方や、どのようにすれば企業や NPO は社会事業を成功させられるのかといったことを、ホワイトバンドの失敗を例に詳しくご説明いただいた。

3. 市川裕康様（株）ソーシャルカンパニー代表

日時：7月7日（水）

場所：渋谷リスベクトカフェ

参加者：高田 修太、木本 篤茂

日米学生会議の OB でいらっしゃる市川裕康様に、分科会におけるディスカッションの方向性について、また、米国における社会起業家、ソーシャルメディアなどに関してお話を伺った。Table For Two（日本発の、開発途上国へ食事を寄付するプログラム）のメニューをいただきながら、「社会起業家」という言葉自体の曖昧さや最近のソーシャ

ルメディアのトレンドなど、非常に興味深いお話をお聞かせいただいた。

4. ルース・ジョーンズ様（ソーシャル・ベンチャー・パートナーズ・インターナショナル事務局長）と共に都内社会起業家訪問

日時：7月10日（土）

場所：みやじ豚、コペルニク、SHOKAY、JICA

参加者：高田 修太、尾崎 裕哉、高橋 亜矢

シアトルに本部を置く、社会的ベンチャー企業を支援する団体である Social Venture Partners International (SVPI) は東京支部を持っている。その投資先対象となる3企業を SVPI のディレクターであるルース・ジョーンズ様と共に周らせていただいた。各々の企業の事業や理念を学びながら、夜はルース様の講演会に同席させていただき、米国の社会的企業の現状やベンチャー・フィランソロピーの概況を学んだ。

5. ムハンマド・ユヌス 講演会（グラミン銀行総裁）

6. ビル・ドレイトン 講演会（アシヨカ財団創立者）

上記2つの講演会を、当分科会メンバーを中心に、分科会を越えて JASCer で訪れた。社会起業家と言えばこの2人、といっても過言ではない著名人の講演を聞き、彼らのマインドについて学ぶことができた。

（高田 修太）

■本会議中の活動

当分科会では、各サイトにおけるフィールドトリップを通じたケーススタディの分析と、ファイナルフォーラムへの準備を並行して行った。本会議前に日本側とアメリカ側参加者は二人一組でのペアを作り、共通のトピックについて事前準備をし、本会議にて他の分科会メンバーに発表していった。毎回のプレゼンテーションを通じ、社会起業家についての理解を深めると共に、「持続可能な事業なのか」といった疑問について深い議論を繰り広げた。担当したメンバーと内容は次の通りである。（日本側担当者による執筆）

第4章 分科会活動

1. 高橋・Kunihiro：フローレンス

私は、ペアのアメリカ側参加者が日本人だったこともあり、アメリカ側へ日本の社会企業を紹介したいという思いから、病児保育・病後児保育を行っているNPO フローレンスについてプレゼンテーションをした。

はじめに、アメリカ側に病児保育が必要とされる日本の社会背景を理解してもらうため、日本の核家族化、女性の労働問題や保育施設の不足、などについて説明し、その上で、フローレンスの事業形態、活動地域、会員システム、料金システムを紹介した。私たちは分科会での議論を通じて、社会企業に必要な条件として、①直接的行動を取る、②複製可能なモデルであること、③持続可能であること、④革新的であること、⑤社会的価値に集中すること、⑥草の根（市民）を利用すること、の6つをあげていた。そのため、フローレンスがそれぞれの条件に当てはまり、社会企業と呼べるかどうか、また、社会企業の条件として以上にあげたものでのものよいかどうか、それぞれの条件に当てはめた特徴や問題点について話し合いを行った。

社会企業についての議論だけでなく、日本とアメリカの社会問題や家庭状況、女性の労働環境の違いなどについて議論をしたことは非常に興味深かった。それにより、地域や国によって異なる固有の社会問題に対し、社会企業がどのようにアプローチをしていけるのかを話し合うことができ、異なる地域での適用性や複製の可能性について議論を広げることができた。それが、ファイナル・フォーラムでのケーススタディの紹介にもつながり、有意義なプレゼンテーションとなった。（高橋 亜矢）

2. 郭・Yuri：CAMFED

(Campaign for Female Education)

アフリカでは2400万人に至る女兒が教育の機会を与えられておらず、貧困・HIV/AIDSと戦っている。こうした状況の改善のために教育支援を行う団体がCAMFEDである。こうした女性教育は、女性の地位を向上し、健全な社会を作ることにより、全ての子供に教育の機会を与えることができるという

プロセスを目指す。CAMFEDは「Education can change everything.」というスローガンのもとで1993年から活動してきた。その成果として、女性が教育を受けることによって、25パーセントの収入が増えたとともに、HIV/AIDSの感染率が3倍も減ったことがあげられる。更に、5歳以下の子供の死亡率も40パーセントまで下がった。CAMFEDが他の女性教育支援団体と違うところは、長期的に見た支援を行う点である。ただ教科書や教育費を支援する一時的な支援と違い、一旦支援が始まったら全教育課程に至る教育費を援助することが特有である。また、独自のSeed Money Programを通じ、ビジネストレーニングや資金の運用、マネジメントなどの職業訓練も同時に受けることができる。加えて、CAMAというCAMFED卒業生のネットワークも持つ。女性の地位が低いアフリカ社会での女性支援において重要なアクターになるということや、CAMFEDからCAMAへの一次的支援から、CAMA同士での二次的支援までの波及効果も期待される。このようなネットワークは持続性のある支援ということから意義がある。CAMFEDが持つビジョンは社会的企業といえるかもしれないが、彼らの資金源はほぼ寄付に依存している。このためCAMFEDは社会的企業ではないが、普通の非営利組織ではあるという結論に至った。しかし、Webから気軽に寄付ができる、地域の現状に合わせた支援が行われる、その結果をWebに公開することによって透明性を保つというところは高く評価できる。（郭 ヒギョン）

3. 木本・Bryan：グラミン銀行

私たちは社会起業の草分け的存在であり、最も成功しているもののひとつであるグラミン銀行を紹介した。グラミン銀行は私たちが事前に日本で講演を聞くことが出来たノーベル平和賞受賞者のムハンマド・ユヌス氏により設立された。この団体は、社会的地位が低く、既存の金融機関から融資を受けることが出来ない人々に対し融資を行う「マイクロクレジット」という活動を行っており、グラミン銀行では特に女性たちをターゲットに定めている。

私たちはグラミン銀行に関する歴史・誕生の背景・実際に貸付を行う際の融資基準や手続き・他のマイクロクレジット団体と異なる特色・社会にもたらしているインパクト・団体の構成・事業の収益源と持続可能性・グラミン銀行が金融領域以外で展開している事業の概略を説明した。

このプレゼンテーションの中ではさらにグラミン銀行が、私たちがこの時点で考えていた社会起業の要件である「革新性」「社会貢献性」「持続可能性」を持っているかどうかについて検討し、グラミン銀行を社会起業であると結論付けた。それはマイクロクレジットの先駆けであると言う「革新性」、女性を抑圧的経済状況から解放するというミッションの保持と800万人もの女性に実際に融資を行ってきたという実績に裏打ちされた「社会貢献性」、無償の寄付を受け取っておらず、設立当初3年を除いて収入がコストを上回っているという経済的自立性・安定性に基づいた「持続可能性」があると考えたからである。

なおこのプレゼンテーションの後に行われたディスカッションの中では一般企業と社会起業を区別する最も重要な要素である「社会貢献性」が何を示しているかを具体化しようと議論が行われた。この際、「社会的弱者の救済につながっていること」「奢侈ではなく、生命権や自由権といった基本的人権に基づいたニーズに答えていること」「社会問題を解決していること」「言語化するものではなく、直感で判断するもの」といった意見が出た。結論は出なかったが、この部分に関するお互いの認識のずれを確認でき、その後の議論を行う上で役に立った。(木本 篤茂)

4. 尾崎・Patrick : BAYCAT

Bayveiw Hunters Point Center for Arts and Technology (BAYCAT) とは教育と職業訓練を通じて、地域のマイノリティコミュニティと住民にチャンスを与え、自立して生きる力を与える非営利組織である。貧富の差が激しいサンフランシスコ沿岸地域で主に活動をしており、地域の子供たちに、芸術活動による自己表現の機会を与えている。

BAYCATには主に、二つの構成要素がある。一つは、上質なデジタルメディア制作者を輩出するべく教育と訓練を無料で行っている教育部門である。生徒は自身の体験や身の回りの出来事のドキュメンタリーや映画をゼロから作り上げ、生徒同士がお互いのプロジェクトに関わり合い、手伝える事で健全な友情関係が芽生え、コミュニケーション能力の向上を可能にしている。行き場の無い貧困地域の子供たちはギャングに入ってしまう事が多い事から、この様な交流をもたらしているBAYCATは生徒達にとって大切な場所になっている。もう一つの要素は、企業の為の広告媒体を制作している営利組織のSTUDIO BAYCATである。STUDIO BAYCATで得られた資金はBAYCATの運営に使われる。しかし、営利企業といっても、彼らがこなす仕事の全てが有料という訳ではなく、200,000ドル以上のプロボノを提供してきた。地域のNPOやCitibank、Yahoo!の様な大企業、UC Berkeleyといった大学にも関わりがあり、それぞれに最新のスタイルのメディアを提供している。

日本にBAYCATが存在していたら、受講者は数十万円というお金を支払う事になるだろう。そして、日本人はお金を持っているため、芸術活動を学ぶ為にそれに応じた金額を支払うだろう。しかし、私はメディアによる表現の機会を提供する必要性はサンフランシスコと同じ位あると感じている。日本でも学校でいじめ等を体験して、心が傷つき、行き場を無くしている学生が沢山いる。彼らの為にも、BAYCATの様に無料でプロフェッショナル・クオリティーの機材が使える交流の機会が存在すれば、彼らの自尊心を向上させ、表現する術を与えるだけではなく、より上質なメディア教育と訓練の機会を増やす事から、結果として日本のメディア技術のレベルの向上につながると考えられる。(尾崎 裕哉)



写真：本会議中のディスカッション

また、アメリカ国内におけるフィールドトリップでは、毎回入念な事前準備・勉強を欠かさずに行い、実際に訪問した際に有意義な質問ができた。このようなケーススタディを通し、社会起業家とは何か、といった我々なりの定義を決定していった。フィールドトリップについては、次の通りである。

1. Lilly Endowment 財団

インディアナポリスにて上記の財団を訪問した。私たちは、彼らの寄付する基準や財団の理念などをお聞きすると共に、社会問題を解決するためにはどう支援すべきか、といったことも質問していった。彼らは主に Basic Needs と Art の分野を支援している。前者に関しては、数多くの社会問題に起因する市民のニーズである。これを解決しようとする団体に支援するとのことだ。彼ら曰く、社会問題には Technical なものと Adaptive なもの(幼児虐待や貧困)の2種類あり、前者は「技術」で解決できるが、後者は解決には時間がかかるという。後者をいかに解決するか、ということが社会起業家の使命であり、それを支援するのが彼らの役目であると述べられた。

2. Teach For America(TFA)

団体のインディアナポリス支部の方のお話を伺った。TFA は Harvard をはじめとする名門大学の学生に人気の就職先である NPO であり、アメ

リカ国内の一流大学の学部卒業生を、教員免許の有無に関わらず大学卒業から2年間、教育困難地域の学校に教師として赴任させるプログラムを実施している。インディアナポリスは全米でも特に教育水準が低く、ここに十分な教育を提供し、生徒を成長させることは大変困難なようである。その困難の中での、プログラムの内容や資金繰り、持続性についてお話を伺った。内容としてかなり厳しいプログラムにも関わらず、教師として参加する大学生が修了前に途中で辞めてしまう割合が低いことにも言及し、彼らのサポート体制が充実していることがわかった。

3. D.C. セントラルキッチン (DCCK)

D.C. セントラルキッチンは、残った食材や在庫などを安く仕入れて食事を作り、ケータリングで販売するというビジネスを行っている NPO である。特筆すべきは従業員の構成で、働く人々は皆ホームレスである。ホームレスの社会復帰支援として、この DCCK で職業訓練をしているのである。ここでは、概要や運営について色々とレクチャーを頂き、実際の調理場を見学させていただいた。驚くべきことに、年間の収入は6億円で、うち半分が寄付や援助金、残りは事業による収入だそう。持続可能な事業、そして社会貢献を両立し成功しているケースを見ることができた。



写真：DCCK の活気ある風景

4. アショカ財団

社会起業家の父と言われるビル・ドレイトン(事前活動として講演会にも訪問した)のアショカ財

団をワシントン D.C. にて訪問した。ここでは、財団の理念や、支援する企業を決定する基準などを聞き、革新性・倫理性・持続性を特に重視しているということがわかった。最後に、彼らの思う社会起業家の定義 "someone who has an idea for changing something in the community, and won't rest until impact is made. Should have an impact on multiple levels (the people and the level)." から、議論をさせていただいた。



写真：Ashoka にて

5. Idea Village (ニューオーリンズにおける起業家集団)

ニューオーリンズは、カトリーナ以降の復興に際して多くの起業家が生まれた。その支援するのがこの団体である。オフィスは広々とし、壁一面がホワイトボードでクリエイティブな議論ができる場となっていた。そんな中で、Feel Goodz という天然ゴム製のサンダルを作っている起業家 Kyle Berner とお会いし、お話を伺った。彼らの販売するサンダルは Natural, Comfortable, Ethical と謳っており、環境的側面から社会変革を起こすというビジョンも持っている。我々は今後の展開や、彼らの理念について質問をさせていただいた。当初は社会的企業としてはじめたわけではなく、純粹にビジネスとして始めたという Feel Goodz であるが、現在では環境倫理を優先した社会的企業として注目されており、必ずしも社会起業家というものがないから始まるものではないというケースとして見る事ができた。こちらも DCCK 同様、社会貢献と事業を両立しているものであった。

6. ビルディング・ブロック

建築関連でニューオーリンズで活躍する団体である。環境によく、安価で丈夫な材料を提供し、実際に壊れた家を作り直したり、コンペなどを行ってコミュニティの再構築を図っていたり、幅広く活動を行っている団体。彼らの製品の紹介やオフィスの見学をさせていただいた。

7. ラッキー・グナセクラ氏

(フロントライン SMS Medic)

JASC の OB でもある Mr.Lucky に彼の思う社会起業家や事業についてお話を伺った。「社会起業家」という言葉はばかっている、という意見など、我々には刺激的な内容となった。

以上と並行して、ファイナルフォーラムに向けて、社会起業は社会を変革する手段となりうることを発信するため、社会起業家に必要な条件やどのような分野に適用できるのかといったポイント等をまとめていった。

■ファイナルフォーラムでの発表内容

当分科会では、ファイナルフォーラムにおけるプレゼンテーション前に、自作のパンフレットを配布し、オリジナルのムービーを放映した。パンフレットは、第62回会議のそれぞれの分科会のテーマに対し、実際に取り組んでいる社会起業家を紹介する記事を提供し、ムービーでは、上から読むとネガティブな意味に、下から読むとポジティブな意味に捉えられるような独自に編集した文章を流し、プレゼンテーションの導入とした。

社会問題を解決する手段は数多く存在する。政府や国際機関といった公の立場、あるいは既存の NPO や企業でも可能である。そのような中で、社会起業家とは他の人々が解決できていない部分にアプローチしていく。我々が考えた社会起業家・社会企業に必要な条件は以下の通りである。

- Take Direct Action…直接的行動を取る
- Have a Replicable design or model
…複製可能なモデルであること

第4章 分科会活動

- Maintain sustainability …持続可能であること
- Be Innovative …革新的であること
- Focus on Social Value
…社会的価値に集中すること
- Utilize Grassroots
…草の根（市民）を利用すること

また、社会起業家に必要なマインドセット（創造性など）も、ケーススタディを元に述べた。以上より、我々は社会起業の定義を「革新的、持続可能かつ複製可能な直接的行動により脆弱な社会の問題を解決していく」とした。このような社会起業という手段を通して、今回の日米学生会議における分科会の扱う諸問題に関しても解決へのアプローチを取れることを紹介し、社会起業の可能性について、参加者を鼓舞してプレゼンテーションを終えた。



写真：ファイナルフォーラムの準備



写真：ファイナルフォーラムで発表する参加者

■分科会コーディネーター後記

第61回会議の終りにこの分科会を作ったとき、

「社会起業家って自分も興味があるし、流行っているから分科会作って見たら面白いかも。」という安易な理由があったことを思い出した。ただ、この分科会に込めた思いは強かった。日本はなぜ彼らの活躍できる土壌が整っていないのか、それをアメリカから学べるのではないかと。そして、社会起業家として成功するためには何が必要なのか。アメリカでそれを見ることができると期待して作った。そして、期待した通りになったのではないかとと思う。

本分科会を振り返ると、非常にフィールドトリップが多く、外にでて考える日々であった。眠たい目をこすりながら遅刻しそうな中全力で走ったり、うだるような暑さのニューオーリンズで朝早くから出かけたりしながら、実際の現場を見ることが私たちの分科会の原点であったと思う。ただ、それを「見学」するだけでは小学生の社会科見学になってしまうため、入念な事前学習・質問準備を行った。ここは自分たちながら評価できる場所であったと思うし、十分にできたと思われる。はじめは「この団体、微妙じゃないか。一体何がやりたいんだ」と思っていたところでも、考えた質問をぶつけると、意外な答えが返ってきて、一同そろって感動したことも懐かしい。このような一つ一つの努力が分科会の議論を深いものにさせてくれたと思う。

また、「社会起業家」というテーマらしく、メンバー全員がクリエイティブで新しいこと、楽しいことを好んで活動を行っていた。ファイナルフォーラムに向けては、単なるプレゼンテーションではつまらない、周りをencourageしよう、という目的を共有していた。ある意味では、他のJASCerへのインフルエンサーであったと言えよう。ムービーも非常にユニークでクリエイティブであったし、出てくる意見も面白いものが多く、時には非論理的な意見に対してぶつかり合いながらも、皆でまとめていった。

あえて、反省点を挙げるならば、「日本語」が問題であったと言えよう。アメリカ側参加者5名のうち、2名が日本語を話せるため、時に日本語で

議論が盛り上がりすぎてしまうことがあり、T（通訳）を多発していたことだ。英語に disadvantage のある日本側参加者とアメリカ側参加者の足並みを揃えるためにも T は重要であるが、日本語→英語の T の多用は個人的にはあまり好ましくなかったのでは、と思っている。

最後に、フィールドトリップを受け入れてくださった皆様、そして私の稚拙な英語にも関わらず最後まで共に取り組んでくれた RT メンバーの皆、数多くのフィールドトリップをセットしてくれた上に粘り強く私とミーティングをしてくれた RT パートナーの Mariama Holman に対し、謝意を述べたい。本当にありがとうございました。

(高田 修太)

▼ファイナルフォーラムで配布したパンフレットの一部分（左）と表紙（右）

● CASE STUDIES and RELATED RTs

TEACH FOR AMERICA * 21st Education RT

In order to alleviate students' achievement gap in schools of low-income communities, TFA provides young and well-trained teachers to help break the inequity in public education across the nation. This non-profit organization also aims for these corps members to become long-term leaders in reaching educational equality.
CONTACT: www.teachforamerica.org

SEEDS of PEACE Security RT National Identity RT

Founded in 1993 by journalist John Wallach. Seed of Peace is dedicated to empowering youth from regions of conflicts with the leadership skills, which is required to advance further understanding and coexistence among countries by offering a great number of leadership programs. Currently, the organization's focus is in the Middle East and South Asia, such as Egypt, Israel, Palestine, Iraq, and Saudi Arabia.
CONTACT: www.seedsofpeace.org

D.C. Central Kitchen * Sustainable Regionalism RT

D.C. Central Kitchen is a "Community Kitchen" which turns leftover food into meals for homeless people every day. Its mission is "Combating hunger and creating opportunity." It makes 4,500 meals per day and 40% of the meals are donated or recycled foods and 60% are purchased from local farmers. DCCK also offers Job Training Programs to the homeless, where they learn to cook and face self-empowerment. Some graduates of this training have started "Fresh Start Catering", which provides a contract foodservice for clients such as high schools and governments who require regularly delivered, nutritious and healthy meals at a reasonable cost. It is one of the most important sources of income and precious place to work in society for homeless people.
CONTACT: www.dccentralkitchen.org



写真：ファイナルフォーラム後の日本食レストランでの打ち上げ



写真：RT パートナーと。

左が Mariama、中央が高橋、右が高田

SOCIALENTREPRENEURSHIP RT

社会起業家

8/17/2010
62nd Japan-America Student Conference
Final Forum
Social Entrepreneurship RT Pamphlet

Produced by	
Japanese Delegates	American Delegates
Shunta Takada	Mariama Holman
Atsushige Kimoto	Bryan Burns
Aya Takahashi	Kunihito Shimoji
Hisaya Ozaki	Patrick McCurdy
Kwak Hee Kyung	Yuri Hongo